



「キリスト教の二つのシンボル」

キリスト教センターミカエル 加藤俊彦

キリスト教のシンボルとは何でしょうか？もっとも典型的なものが二つあります。一つは十字架です。十字架のついている建物があれば、世界のどこに行っても、すぐにキリスト教の教会だとわかるほどに、十字架はキリスト教のシンボルです。もう一つは母マリアの胸に抱かれている、あるいは飼い葉桶に寝ている幼子イエスです。聖母子画や像はヨーロッパの美術館に行くとき必ず目にする事が出来るほど、広く世間に流布しています。

この二つがなぜキリスト教のシンボルなのでしょう？十字架は犯罪者を処刑する道具です。恐らく、人間が作り出した処刑の道具の中で最も残酷なものの一つだと思います。そのような、むごい死に方をする道具、その悲惨な姿、苦しむ姿が、なぜキリスト教信仰において神様を象徴するものなのでしょう？あるいは、馬や羊やヤギなどが暮らしている、糞の匂いのする、薄暗い小屋の中で、家畜が餌を食べる桶に寝かされている無力な赤ちゃんの姿が、なぜ神様のシンボルなのでしょう？不思議だと思いませんか？両方とも、まったく「神様」らしくはありません。「神様」とは、もっと立派で、超人的な力をもった、強そうで、威厳のある姿をイメージしないのでしょうか。ところが、神様をこの二つのシンボルで表したキリスト教が、この世の中に広く宣べ伝えられ、世界中でもっとも信仰者が多いとされる宗教となりました。この二つのシンボルには、どこの国の人であれ、どのような状況にある人であれ、すべての人の心を動かす何かがあり、人の心の奥底に訴える何かがあったのだと思います。それは何なのでしょう？

一言で言えば、「優しさ」だと思います。十字架にはりつけになっているイエスの姿や飼い葉桶に寝ている幼子イエスの姿に、強さや綺麗さや威厳は感じられません。そこにあるのは、弱さや醜さ、苦しさや無力さです。神様が強くて綺麗で威厳がある姿であったとしたら、多分人はそのような神様に近づくことが出来ないと思います。なぜなら、人間は、強くないし、綺麗でもないし、威厳に満ちてもいません。人間本来の正直な姿は、弱いところもあるし、醜い部分もあるし、苦しんで疲弊していることもあるし、無力です。だから、人は神様の弱く、醜く、苦しく、無力な姿に接すれば、自分のそのような姿を神様が分かってくれると思えます。そこに人は神様の優しさを感じ、慰めを得ることができるので、安心して近づくことが出来ます。そのような神様の優しさを、この二つのシンボルに感じられるので、人はそれらに心を動かされ、ひかれていったのだと思います。

キリスト教の神観は、神様が天上の高いところにおいて、人間が修行を積んで、あるいは身を清くして、だんだんと神様に近づいていくのではなく、神様の方から人間の弱さ、醜さ、苦しさ、無力さに近づいてくるというものです。この神観が、この二つのシンボルには表されています。クリスマスは、その一つの象徴である幼子イエスをお祝いする日であり、イースターは、もう一つのシンボルである十字架と復活をお祝する日です。

